

「説岳全伝」と「水滸伝」

渡辺，宏明

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

92

(開始ページ / Start Page)

169

(終了ページ / End Page)

179

(発行年 / Year)

1995-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004590>

『説岳全伝』と『水滸伝』

渡 辺 宏 明

はじめに

北宋末から南宋初めにかけて、宋を守り金と戦って活躍した岳飛（1103-1142）の生涯を描くものとして最も大部のものは、『精忠岳伝説本岳王全伝』、通称『説岳全伝』である。

かつて『大宋中興通俗演義』と『宣和遺事』⁽¹⁾と題して、『説岳全伝』以前にあった小説『大宋中興通俗演義』と『宣和遺事』との関係について述べ、そこで『説岳全伝』には『水滸伝』が取り入れられていることについて触れたが、ここでは、『説岳全伝』と『水滸伝』との関係について考察を試みる。

1. 『説岳全伝』における『水滸伝』

『説岳全伝』の刊本で現存する最古のものは清の同治9年（1870）の木版本である⁽²⁾。「仁和銭彩錦文氏編次 永福金豊大有氏贈訂」と題し、序には「甲子孟春」とある。清代の『禁書総目』によると、この書は乾隆年間（1736-1795）に禁書になっているので、その前の「甲子」の年である清の康熙23年（1684）に刊行されたと思われる。銭彩と金豊の二人がいかなる人物であるかについては全く不明である。

物語としては、岳飛が、釈迦のもとにいた金翅鳥^{こんじちよう}の転生として誕生するところから、王貴、張頭、湯懷、牛皐^{ぎゆうこう}といった義兄弟とともに活躍し、秦桧によって謀殺され、岳飛の死後、子の岳雷が金を退け、一門が栄えるまでを描いている。もちろん、史実に合わない点が多く、全くの創作である。ただし、創作とはいっても、それ以前の演義小説や戯曲の内容を多く取り入れており、いわば、明代に語られた岳飛の故事の集大成である。

時代としては、『水滸伝』は宋の徽宗^{きそう}の代の物語であり、岳飛の活躍は徽宗

が金に捕らわれた頃から始まるので、『説岳全伝』は『水滸伝』のその後を描くことにもなっている。

『説岳全伝』では、まず、第三回「岳院君閉門課子 周先生設帳授徒」(岳院君は門を閉ざして子に課し 周先生は帳を設けて徒に授く)で、岳飛の師の周侗(史書では周同)が、かつての梁山泊の豪傑、豹子頭林冲と玉麒麟盧俊義の師でもあったことが語られ、第二十七回「岳飛大戰愛華山 阮良水底擒兀朮」(岳飛は愛華山に大いに戦い 阮良は水底に兀朮を擒らう)で、梁山泊にいた菜园子張青の息子の張国群と、同じく双槍董平の息子の董芳、それに続いて短命二郎阮小二的息子の阮良が登場して岳飛の配下に加わるのを皮切りに、混世魔王樊瑞、双鞭呼延灼、浪子燕青など梁山泊の豪傑の生き残りか、その息子たちが登場する。

『水滸伝』では、清初までは、百回本、百二十回本によって、梁山泊の豪傑たちが朝廷に帰順した後、遼や方臘の討伐に功がありながらも非業の最期を遂げたことが語られていたが、金聖嘆(?-1661)の七十回本の『第五才子水滸伝』が明末に登場して以来、中国では、それまでの百回本や百十二回本は姿を消し、『水滸伝』は、梁山泊に豪傑が勢ぞろいしたところで終わることになっていた。『説岳全伝』が書かれたのは、金聖嘆の没後二十年余り後であるが、まず、その中で、梁山泊の豪傑はどのように描かれているかを述べることにする。

第三回で、岳飛の師の周侗が、林冲と盧俊義の師であったことが読者に明らかにされた際、周侗は、息子について尋ねられ、

「小兒跟了小徒盧俊義前去征遼，歿於軍中。就是小徒林冲，盧俊義兩箇，也俱被奸臣所害」(息子は弟子の盧俊義について遼征伐に行き、討ち死にしました。弟子の林冲と盧俊義の二人は、いずれも奸臣にあやめられました)⁽³⁾

と答えている。ここに、遼討伐と、豪傑が後に奸臣に殺害されたことが述べられており、これによって、『説岳全伝』に取り入れられた『水滸伝』は、金聖嘆の七十回本ではないことが明らかになる。

ただし、盧俊義は奸臣に毒殺されているが、林冲は、方臘討伐の帰路、杭州で病没しているのので、直接奸臣にあやめられたわけではない。討伐に赴かされることによって間接的に「被奸臣所害」となったということか。

遼討伐については、第三十六回「何元慶兩番被獲 金兀朮五路進兵」(何元

慶は尙番獲を被り 金の兀朮は五路に兵を進む)でも語られる。兀朮に追われて南へ逃げる宋の高宗を守るべく、杭州に近い海塩にいた呼延灼が登場し、

「我乃梁山泊五虎上将呼延灼是也」(我こそは梁山泊五虎上将の呼延灼なり)

と名乗り、

「我当初同宋公明征伐大遼、鞭下不知打死了多少将」(かつて宋公明と遼を征伐し、数知れぬ将兵を鞭で打ち殺した)

と述べている。呼延灼はここで討ち死にするが、『水滸伝』では、兀朮の率いる金軍と戦い、淮西へ進軍して戦死したになっており、その最期は比較的近い。

ついで第三十七回「五神通顯靈航大海 宋康王被困牛頭山」(五神通は靈を顯し大海を航し 宋の康王は牛頭山に困を被る)では、宋江について語られる。海路を逃げる高宗一行は、賊に捕らえられるが、一行が高宗らであることを知ると、頭目の一人が一行に回廊の絵を見せ、

「這是梁山泊宋大王的出身。我家大王，就是北京有名的浪子燕青。只因宋大王一生忠義，被奸臣害死，故有此大冤」(これは梁山泊の宋親分の生涯だ。うちの親分は北京で名を知られた浪子の燕青だ。宋親分は一生忠義を通したのに奸臣に殺されたから、こんなに恨んでいるのだ)

と語る。そこで、高宗に随行していた李綱が、

逐一看去，看到「蓼兒洼」，便道：「原来如此。」便放声大哭起来。(一つ一つ見ていったが、「蓼兒洼」のところまで見ると、「そういうことだったのか」と言って声を放って大泣きに泣きだした)

ということになる。

ここで、燕青が登場し、また、宋江が奸臣に害されて蓼兒洼に葬られたことに触れている。燕青は、『水滸伝』では、方臘討伐の帰路、宋江らと別れて姿を消しているの、杭州の近くで賊となっていたとしても矛盾はない。

次に、『水滸伝』と『説岳全伝』とで異なる点をいくつか挙げておく。

例えば、第十六回「下仮書哈迷蚩割鼻 破潞安陸節度尽忠」(仮りの書を下し哈迷蚩は鼻を割かれ 潞安を破られ陸節度は忠を尽くす)において、金の哈迷蚩が、宋の元帥の韓世忠からの使いになりすまして陸登のもとへ偽りの書面を持って行くが、身元確認のため、陸登から韓世忠について尋ねられ、

「我家老爺(注・韓世忠を指す)同張叔夜招安了水滸寨中好漢得功，欽命

鎮守両狼関」(私のところの主人は、張叔夜とともに水滸寨中の好漢を招安して功があり、欽命によって両狼関を守っております)

と答えている。『水滸伝』では、張叔夜が宿太尉に協力して宋江らとの交渉にあたっているが、韓世忠は登場していない。

張叔夜と宋江のことは、『宋史』の張叔夜の伝に見え、こちらでは、張叔夜が策略を用いて賊を討伐し、宋江は副賊を捕らえられたので降服したことになるが、韓世忠の名はそこには見えない。韓世忠の伝にも、宋江討伐に加わったとはない。また、『宋史』によれば、張叔夜はあくまでも討伐したのであって招安したわけではない。

また、第六十三回「興風浪忠魂顕聖 投古井烈女殉身」(風浪を興^{おこ}し忠魂は聖を顕し 古井に投じ烈女は身を殉ず)において、岳飛が謀殺された後、岳飛の次男の岳雷が難を避けてさすらううち、韓起龍、韓起鳳の兄弟と知り合うが、その二人は、

「我弟兄兩箇是水滸寨中百勝將軍韓滔的孫子。当初我祖公公同宋公明受了招安、与朝廷出力、立下多少功劳、不曾受得封賞、反被奸臣害了性命」(我ら兄弟二人は、水滸寨中の百勝將軍韓滔の孫です。かつて祖父は宋公明と招安を受け、朝廷のために力をつくし、いくばくかの功勞がありましたが、報償を受けることもなく、かえって奸臣のためにあやめられました)

と身の上を語っている。『水滸伝』では、韓滔は、方臘討伐の際に討ち死にしており、先に述べた林冲と同じく、直接奸臣に殺されたとは言い難い。

また、『説岳全伝』では、方臘討伐については直接言及することはなく、『水滸伝』では、方臘討伐の帰路、杭州にしばらくとどまる間、魯智深の円寂、武松との別れ、楊雄、時遷の病死などさまざまなことが起こるが、『説岳全伝』では、宋が都を臨安に移して後、杭州近辺が舞台となることは多いにもかかわらず、それらのことについては触れていない。

すでに述べたように、遼征伐について触れていることから、『説岳全伝』に取り入れられている『水滸伝』は、七十回本ではないことは明らかである。また、宋江や盧俊義が奸臣に害されたことを述べているが、田虎、王慶については触れていないことから、おそらく百回本に基づいて『水滸伝』を『説岳全伝』に取り入れたものと推定される。

なお、豪傑の最期の違いは、『説岳全伝』の物語の展開に合わせて変えたも

のとしても、方臘討伐に関することがない点で、果たして『説岳全伝』の作者が完全な百回本『水滸伝』を読んでいたかどうか疑問が残る。

しかし、『説岳全伝』は、方臘征伐に関しては、人物や出来事ではなく、話の筋立てを取り入れたと思われる部分がある。それは第五十回「打酒壺福将遇神仙 探君山元戎遭厄難」(酒壺を打ち福将は神仙に遇い 君山を探り元戎は厄難に遭う)から第五十一回「伍尚志火牛衝敵陣 鮑方祖贈宝破妖人」(伍尚志は火牛にて敵陣を衝き 鮑方祖は宝を贈り妖人を破る)にかけてのところである。

岳飛が、湖広に勢力を張る賊の楊么^{ようよう}討伐に苦慮している時、金と内通している秦檜は、岳飛を亡きものにしようと、天子から岳飛に下賜された御酒に毒を入れ、岳飛の毒殺をもくろむ。岳飛の部下の牛皐^{ぎゅうこう}がそれを知り、酒壺を割ると、天子から賜った品を壊したということで岳飛に追放される。岳飛の元を去った牛皐は、林の中で神仙の鮑方に出会い、出家して弟子となる。しかし、牛皐は出家の生活に耐えきれず、鮑方は牛皐に妖人を破るための道具をさずけ、岳飛が楊么を討伐するのを助けさせるのである。

この部分、『水滸伝』で、魯智深が、賊を追ううちに深山に迷い込み、林の中で出会った老僧の助けを得て方臘を捕らえる話を思わせる。また、秦檜が天子からの酒を利用して岳飛を殺そうとする点は、宋江が毒殺されたことを連想させる。

なお、魯智深が不思議な経験を経て賊を捕らえる話は百二十回本の田虎討伐にもあり、そちらをもとに牛皐の話を創作した可能性もあるが、田虎討伐は、百回本に後から挿入されたものであり、方臘討伐の話をもとに、田虎討伐における魯智深の話を作り上げたと考えることができるので、『説岳全伝』の作者は百二十回本を知らなくとも、牛皐の話を作ることができる。

まとめると、『説岳全伝』の作者が『水滸伝』を取り入れるにあたってもととしたのは、百回本と思われる。ただし、宋江の最期などについては知っていても、方臘討伐については、魯智深が方臘を捕らえる話以外の部分については、細かくは知らなかった可能性がある。

なお、『説岳全伝』の内容については、同治の刊本より古いものがないため、はたして当初の姿とどめているかという問題がある。

例えば、杜穎陶は、『岳飛故事戯曲説唱集』⁽⁴⁾の「後記」において、第九回「元帥府岳鵬拳談兵 招商店宗留守賜宴」(元帥府に岳鵬拳は兵を談じ 招商店

に宗留守は宴を賜る）に、乾隆年間以後に流行したはずの「説唐演義」の内容が引かれていることを挙げて、現存する『説岳全伝』は後人の手によって改竄されたものではないかと推測している。

しかし、現存するものが改竄されたものであるとしたら、『水滸伝』に関する部分の多くは削除されたのではないだろうか。

帰順して遼を討伐したという話は、七十回本しか知らなかったはずの清末の読者には理解できないことであり、李綱らが、宋江の生涯を描いた回廊の絵を見ると、「蓼児洼」とだけあっても、何のことか理解できないはずである。これらの部分が残っているということは、現存の『説岳全伝』は、七十回本以前の『水滸伝』の姿をある程度とどめているということであり、改竄があったとしても、大きなものではなかったろうということが、『説岳全伝』と『水滸伝』との関わりかたから推測されるのである。

2. 『水滸伝』を取り入れた理由

次に、なぜ『説岳全伝』は『水滸伝』を取り入れたのかということについて考えてみたい。

『説岳全伝』は、『水滸伝』や『三国志通俗演義』などのように、それまでの演義小説や戯曲などを集大成する形で登場した。しかし、同じような過程を経た『水滸伝』や『西遊記』は明代中期に成立しているのに比べ、『説岳全伝』の成立は遅く、清代に入ってからである。

『三国志通俗演義』や『西遊記』は、もともになった話がかなり昔のものであり、長編として成熟するのに十分な時間が与えられていたため、早くに成立できたと考えることもできるが、『水滸伝』は、岳飛が活躍する直前の話であり、『三国志通俗演義』に比べると短時間で長編として完成している。しかし、ほぼ同じ時期のことでありながら、岳飛の故事は、『説岳全伝』の誕生までに時間がかかっている。

その理由を、他の章回小説と比較して考えてみると、まず、岳飛を取り巻く人物の乏しさに思い当たる。

例えば、『三国志通俗演義』では、劉備、関羽、張飛の三人に、諸葛亮という超人的な能力を持つ人物が味方し、魏の曹操、呉の孫権と戦い、三国の争いが展開される。登場人物の多さでは群を抜いており、しかも、それぞれの人物

の性格、役割がはっきりして話を膨らませやすくなっている。

『水滸伝』になると、豪傑だけでも百八人であるから、主な人物の話だけでもかなりの長さになる。ただし、百八人の豪傑が登場するとはいっても、宋江や呉用、李逵など一部の人間を除いては、ほとんどみな同じような性格であり、個性的な人物は乏しいが、人物の多さと、豪傑が集まるまでのそれぞれのエピソードの面白さ、そして、全体の構成の巧みさによって傑作たりえている。

『西遊記』は、中心となるのは三蔵法師、孫悟空、猪八戒、沙悟浄の四人だが、この四人の性格の違いがはっきりしているので、障害に出会った時の対応の仕方によって話が膨らみ、例えば、悟空があまりに殺生をするので三蔵が叱りつけ、悟空が故郷の花果山に帰ってしまうというような話を作ることができる。また、長い道中なので、次々に障害を設け、一行の行く手を阻む妖怪を登場させるという方法も用いられている。

岳飛の故事に戻ると、まず、岳飛に関わる人物の数が多くない。部下として史書に名が記されているのは、牛皋、張憲、王貴、楊再興ぐらいで、このうち王貴は、史実では、秦桧に脅迫され、岳飛を裏切って虚偽の告発を行い、岳飛の謀殺に手を貸してしまった人物なので、あまり活躍させるのは具合が悪い。『説岳全伝』でも、王貴は、岳飛の少年時代からの義兄弟として登場するわりには活躍する場面がなく、裏切りはしないものの、岳飛の死後、牛皋たちと太行山にこもっている時に、あっけなく病気で死んでしまう。

『説岳全伝』に先行する『大宋中興通俗演義』には、岳飛以外の武将の活躍場面もあり、また、朝廷内での主導権争いの様子なども描かれていたが、『説岳全伝』は、岳飛だけを突出させたため、他の人物の話は減らさざるを得ず、話を膨らますことのできる人物が不足することになってしまっている。

戯曲や説書で語られたりしていくうちに、配下となる王横、張保といった人物の造形が行われ、エピソードも増やされていったが、岳飛の物語は、『水滸伝』のように、明代中期に長編小説として成熟することはできなかった。

『説岳全伝』を『水滸伝』に結びつけ、梁山泊の豪傑やその子供たちを登場させたのは、一つには、この、登場人物の不足を補うためだったのではないだろうか。

『三国志通俗演義』や『水滸伝』では、劉備や宋江のもとに、それぞれ諸葛亮、呉用という天才的な軍師がいたが、岳飛は、自分自身が大将であり、優れ

た軍師でもあった。一応、諸葛亮の子孫という諸葛英が部下となるが、諸葛亮ほどの活躍はしない。岳飛が余りにも際立ちすぎていて、他の人物に分散させるべき性格も一人で背負い込んでしまっている。岳飛を完璧な人間としたために、他の人物は活躍しにくくなっている。

ただ、牛皋は、岳飛とは反対の性格を与えられ、何よりも酒が大好きで、字も読めない。そのため、牛皋だけは個性を発揮し生き生きとした活躍の場を与えられている。

なお、登場人物が不足しているとはいっても、『説岳全伝』は、ある面では人物が揃っている。それは、岳飛の前に立ちふさがり奸臣たちである。

岳飛の謀殺に直接関わる秦桧と万俟卨⁽⁵⁾をはじめ、張邦昌、王鐸、張俊、劉豫と、奸臣が次々に登場し、それぞれ報いを受けて相応の最期を迎える。例えば、張邦昌と王鐸は、第十一回「周三畏遵訓贈宝剑 宗留守立誓取真才」(周三畏は訓に^{おしえ}したが^{したが}て宝剑を贈り 宗留守は誓いを立て真才を取る)で、宗沢とともに武挙の試験官となった際に、もし不正を行ったら豚や羊になろうと誓い、第三十九回「祭帥旗奸臣代畜 挑華車勇士遭殃」(帥旗を祭り奸臣は畜に代わり 華車に挑み勇士は殃いに遭う)で、その言葉通りに、金兵によって家畜の代わりに殺されてしまうなど、話を膨らませるのに大いに貢献している。

一方、金との戦闘において、岳飛の最大の敵となっている、金国の四太子、完顔兀朮^{ワンヤン・ウジヌ}はどのように描かれているかというと、『説岳全伝』においては、兀朮は、単なる中原を狙う野蛮人ではない。

兀朮は、高宗がまだ康王と呼ばれている時に、捕虜としてそばに置いていたが、決して虐待はしない。

また、第二十六回「劉豫恃寵張珠蓋 曹榮降賊献黄河」(劉豫は寵を^{たの}み珠蓋を張り 曹榮は賊に降り黄河を献ず)で、黄河で守りについていた宋の曹榮が、すでに金にくだっていた劉豫にそそのかされて、たちどころに降伏し、金軍が黄河を渡れるようにすると、兀朮は、心中、「康王が用いているのは、みな、奸臣や、榮華を求めて国を売するようなやからばかりだ。これでどうして国土を守れようか」と、宋室を思いやる。

さらに、双鞭呼延灼が、隠居の身ながら帝のためにと出陣すると、兀朮は、呼延灼の忠義と勇猛ぶりを惜しみ、投降を勧める。もちろん呼延灼が応じるはずもなく、老齢のためもあって討ち死にすると、高宗たちはそれを見て慌てふためいて逃げ出すのに比べ、兀朮は、呼延灼の死を惜しんで、手厚く葬るので

ある。

『説岳全伝』全体を通して、宋が金に敗れるのは、軍事力が劣っていたためばかりではなく、奸臣によって内部から崩れていったのであるという描きかたがなされている。『説岳全伝』において、宋にとって真の敵、そして岳飛にとっての真の敵は、金ではなく奸臣たちなのである。それだからこそ、先にあげたような奸臣たちが次々に登場するのである。

また、『説岳全伝』に登場する梁山泊ゆかりの人物の多くは、奸臣への恨みを抱いている。すでに述べた韓滔の孫や燕青のほかにも、例えば、樊瑞は、奸臣の横暴に嫌気がさして隠棲している。

そもそも、岳飛と、『水滸伝』に登場する梁山泊の豪傑たちには、奸臣によって害されたという共通点があった。

『説岳全伝』の作者が『水滸伝』を取り入れたのには、登場人物を増やして話に幅を持たせるといった目的のほかに、奸臣の横行によって国が滅びたという、明末から清初にかけての社会状況を投影しようという意図を見いだすこともできよう。

おわりに

以上述べたように『説岳全伝』は『水滸伝』と結びついてはいるが、ただ登場人物を借りたという印象が強く、『水滸伝』の人物を活躍させているとは言いがたい。

岳飛は背中に「尽忠報国」（『説岳全伝』など、物語では「精忠報国」となっていることが多い）という入れ墨をしていたと言われ、あくまでも朝廷に対して忠義一筋であったが、それに比べ、『水滸伝』の好漢たちは、世間の規範から外れた生き方によって好漢たり得ていたので、岳飛と同じ道を歩ませるのは困難だったのである。

なお、『水滸伝』の後日談を語るものとして、『説岳全伝』と近い時期に、陳忱（1612?～1670?）の小説『水滸後伝』が成立しているが、こちらでは、梁山泊の生き残りたちは、海外へ雄飛して活躍することになる。

この小説は、百回本『水滸伝』の続編になっており、明の滅亡を目の当たりにした陳忱が、北宋が金に滅ぼされた時代と自分の生きている時代を重ね合わせて書いたもので、国が滅びていく様子がありありと描かれている。登場する

のは、梁山泊の豪傑の生き残りか、豪傑の子供たち、あるいは豪傑と関わりのある人物で、最後には、リーダーの李俊がシャムの国の王になってしまう。

この小説の舞台となる時期は、岳飛が活躍していた時期と重なるのだが、岳飛の名前は、第十九回に、金に立ち向かうために選ばれた十人の将軍として、

王進、劉光世、汪豹、岳飛、楊沂中、韓世忠、呼延灼、張俊、馬杰、胡定国と列記してあるところに一度出てくるだけである。

ここでは十人の筆頭に「王進」という名があるが、これが、『水滸伝』の最初のところに登場する、九紋竜史進の師匠だった人物で、彼も後には李俊の仲間となる。つまり、ここは王進が後に登場するための伏線になっているだけで、岳飛の名はいわば添え物なのである。

岳飛は歴史上の有名人物であるのに、『水滸後伝』ではこのようにほとんど無視されている。その理由は、やはり、岳飛と、『水滸後伝』に登場する豪傑たちとのよってたつところの違いにあらう。

岳飛は、絶望的な社会状況の中で、最後の最後まで抵抗を試み、何とかして国家体制を維持しようとしたが、李俊たちはもっと自由な視点を持っており、はじめは軍に加わって金と戦いもするが、無理に国家に義理立てするようなことはせず、海外に新天地を求めている。岳飛と李俊たちとは、考え方が全く相いれないのである。従って、この小説に岳飛の出番を作ることになると、英雄同士が対立してしまうことになる。

陳忱が岳飛に対して否定的な考えを持っていたのならそれでもいいだろうが、彼も、祖国が滅びたことに衝撃を受けて小説を書いたほどで、強い愛国心を持っていた。従って、ほとんど愛国心の固まりのような岳飛を否定的に描くことはできず、岳飛を李俊たちと同じ場面に登場させることができなかったのである。

その、岳飛と『水滸伝』の好漢の思想的な相違の故に、『説岳全伝』の作者も『水滸伝』ゆかりの人物を存分に活躍させることができなかったのである。

《注》

- (1) 「汲古」(平成3年6月)。なお、その中で、『大宋中興通俗演義』巻二「劉豫激怒斬関勝」(劉豫激怒し関勝を斬る)で、金への投降を決めた劉豫が、それに反対する大刀関勝を切る話があることを挙げ、「現在の『水滸伝』とは異なる水滸物語にもとづいて関勝を登場させたものであろうか」と述べたが、これは誤りである。『宋史』『劉豫伝』に「(劉豫)殺其將関勝、率百姓降金」とあり、『金史』『劉豫伝』に「(劉)遂殺関勝出降」とある。この箇所は、岳飛の物語と『水滸

伝』を結び付けて創作されたのではなく、史書にたまたま『水滸伝』の人物と同名の人物が書かれていたのでこじつけたものであろう。

- (2) わが国の国立国会図書館には、目録の上では同じく同治九年の刊本となっているものが二種蔵されている。内容は同じながら、巻首の人物像を見るに、異なる版本によるものである。一方がもう一方をもとにして彫り直したものか、共通する原型をもとに彫り直したものかは不明。
- (3) 本文は『説岳全伝』（上海古籍出版社。1980）による。句読点と字体は日本で通用しているものに改めてある。なお、上海古籍出版社版の『説岳全伝』は、同治の刊本をもとにしている。
- (4) 俞^{ほくきせつ}藝との共編。上海古籍出版社。1985年。ただし1957年版の改訂版。
- (5) 万^{ほくきせつ}俟^{せつ}畠「万俟」が姓。「万」は「萬」とは別の字。この場合「俟」は「き」と読む。